

DESIRE The Doll 台本

トラック1 意思を持つ人形達

SE 寮に戻ってくるヒロイン

SE カバンの中からアロマ達を取り出すヒロイン

SE 小さな爆発音（ロレッタ／人の姿に）

ロレッタ1 「つくあー！ やつと夜になりましたわね！  
全く、この時間帯になるまで動けないなんて、  
我ながらじれったい仕様ですわ！」

SE 小さな爆発音（アロマ／人の姿に）

アロマ1 「そう？  
ゆっくりり過ぎせるし、僕はいいと思うんだけどなあ」

ロレッタ2 「ええー？ 私は絶対に嫌ですわ！  
せっかく自由に動ける時間帯なのに、  
じっとしているだなんて勿体ないですもの！  
ね、マスターだってそう思うでしょ…って、  
んもう、またそんな驚いた顔をなさってる。  
もう日が沈んでいるんですから、この姿になって当然でしょう？  
貴女が私達を拾って1週間と少し、  
そろそろ慣れて頂きたいですわ」

ヒロイン ご、ごめんね、つい…。

アロマ2

「ふふ、そんな畏まって謝らないで。  
ロレッタも本気で怒っている訳じゃないし、  
それに、意志を持つ人形なんて僕達くらいなものだろうしき。  
ほら、せっかく学院から戻って来たんだから、ゆっくりしよう？」

S E

移動して、椅子に座るヒロイン

アロマ3

「そういえばマスター、今日も先生に褒められていたね。  
魔力の使い方が日に日に上手になってるって。  
ふふ、僕達を使う事にだいぶ慣れてきたって事なのかな。  
ちゃんと役に立っているみたいで良かったよ」

ヒロイン

いつもありがとう、二人とも

ロレッタ3

「うふふ、礼には及びませんわよ。  
だって、こうして人形の姿をしているけれど、  
私達は人の基礎魔力を補う補助道具。  
つまり、貴女がたの力になれなくては、存在する価値が無いのですわ。  
…とはいえ、私達は創造主様が作った自作の産物。  
市販の補助道具なんかよりもよっぽど強力！  
マスターを落ちこぼれだなんて二度と言わせませんわ！」

ヒロイン

はあ…。

アロマ4

「あ、あれ？  
どうして落ち込んだじゃうの、マスター。  
あ…もしかして、ずるい事してるなあって思ってるんじゃない？  
…ふふ、やっぱり。  
僕達と契約を結んだ時も、そうやって渋っていたもんね。  
そういう所、素敵だなあって思うよ。  
でも、これってさ、貴女が手に入れた幸運だと思うんだ。  
だって、僕達がこうしてここに居るのは、  
貴女が拾ってくれたお陰なんだしね」

ロレッタ 4

「そうですね。  
喋ったり大きくなったりする不思議な人形なのに、  
こうしてお傍に置いて下さる。  
そんなお優しい貴女だから、力になりたいと思っ  
ているんですよ？  
不正なんて思われては、ちょっと寂しいですわ」

ヒロイン

…ありがとう。

アロマ 5

「ふふ、やっと笑ってくれた！  
ねえ、貴女は真面目な人だから、  
きっと色々考えちゃうのかもしれないけれど、  
僕達を手に入れた事で、低かった貴女の魔力も補  
えているんだし、  
今は立派な魔術師になる事だけを考えようよ。  
貴女が所属したいと思っている部署の採用試験も、  
あと半年に迫って…あ」

SE

お腹の音

ロレッタ 5

「もう、アロマってば。  
そんな下品な音を出して…はしたないですわよ？」

アロマ 6

「う、ごめん…。  
結構お腹空いちゃってたから…」

ロレッタ 6

「それは私だって一緒ですわよ！  
でも、マスターがまだ何も食べていないのに  
私達がつつくのはみっともないんじゃないん  
じゃありませんこと？」

ヒロイン

いいよ。

ロレッタ 7

「えっ、いいんですの？  
でも、帰宅したばかりですし、疲れているの  
ではなくって？」

ヒロイン

褒められたお礼だから

アロマ7

「お礼、か。  
そんな風に言ってくれるなんて、道具冥利に尽きるね、ロレッタ」

ロレッタ8

「ふふ、本当に。  
それではお言葉に甘えまして、私達が先に頂戴しますわね」

ヒロイン

でも、優しくしてね

アロマ8

「ふふ…もちろんだよ。

身体を張って僕達にご飯をくれるんだもん。

優しく頂くのは当たり前。

…それじゃ、マスター、今日も美味しく頂くね？」

ア9／ロ9

「大事な大事な、貴女の身体を。  
…ふふふ」

トラック2 淫靡な食事

S E

ベッドに座る軋み音

アロマ10

「んちゅ、ん、んちゅ、んん、あむ、んん、んちゅ、ん…。  
もっと、舌絡めてマスター…ん、んちゅ、  
あむ、んん、れろ、じゅる、んん、んちゅ、れろ、じゅる、  
んっ、んちゅじゅるる、んんっ、ふふ、キス、気持ちいいね、マスター。  
んんっ、れろ、じゅるる、じゅるる、んんっ…(以下キス／10秒)」

ロレッタ11

「んもうっ、アロマばかりずるいですわよ！  
いい加減私にもマスターを味わわせて下さいましっ」

アロマ11

「んはあ！  
ふふ、ごめんね、ついがつついちゃった。  
…どうぞ、ロレッタ」

ロレッタ12

「ふふ…！  
さあマスター、次はロレッタといっぱいキスして下さいましね。  
ん…んちゅ、ん、あむ、んちゅ、ん…(以下キス／6秒)  
んちゅ、んはあ…。  
うふふ、ねえマスター？  
さつき、貴女は今日のお礼だっけ仰ってくれましたけど、  
それってね、私達も同じなんですのよ。  
いつも私達を使ってくれて嬉しいなって思っていますの。  
だから、その気持ちをたくさん受け取って下さいましね？  
ほら…もう一度、んちゅ、んん…(以下キス／10秒)」

アロマ12

「ふふ、気持ちよさそうだね、マスター。  
でも、僕の事も意識して欲しいな。  
ほら、こうして後ろからマスターに触れてあげるね」

S E

布擦れ

アロマ13

「ふふ、僕ね、貴女の胸って大好きなんだ。  
ふわふわで触り心地が良くて、  
こうしてずっと触っていたくなるんだよ。  
ん…ん…あつ。  
ふふ、貴女の乳首、もう硬くなっちゃってるね。  
ほら、こうして指で擦っても、全然柔らかくならないし。  
ふふふ！」

ヒロイン

んうっ！

ロレッタ13

「ん、んちゅ、んはあ！  
…うふふ、吐息が荒くなってますわよ、マスター。  
アロマに乳首をこりこりされて、熱くなってきちゃいました？  
ふふ、恥ずかしがらなくてもいいじゃありませんの。  
そうなって欲しいから触れているんですし。  
ね？ もっともっと熱くなりましょう？  
ほら、膝立ちになって。  
下の服、脱がせて差し上げますわ」

SE

服を脱ぐSE

ロレッタ14

「あら？ どうして足を閉じちゃいますの？  
まだ下着が残っていますのに…」

アロマ14

「ふふ、やっぱり下は恥ずかしい？  
それじゃ、その気持ちをもっと解（ほど）かせてあげないとね。  
ほら、こっち向いて、マスター…。  
もう一度、僕とちゅーしよう？  
ん、んちゅ、んっ…（以下キス/10秒）」

ロレッタ15

「ふふ、だんだんと足の力が抜けてきましたわね。  
これなら、下着も脱がせてあげられそう。  
よいしょっと」

SE

下着を脱がせる

ロレッタ16

「あら、まあ。  
うふふ、マスターのこーこ、もうすっかり潤っていますわよ。  
んん…ああ、この魅惑的な香り。  
すぐにでも吸りたくなっちゃいますわね…!  
でも、御馳走は我慢してこそ美味。  
まずはもっと良くして差し上げませんと。  
指、入れますわね、マスター」

SE

水音

アロマ15

「ん、ちゅ、んん…ん、んちゅ…あつ。  
…離れちゃった。  
ふふ、ロレッタの指が入ってきたのを感じちゃったせい？  
今日はちよつと敏感だね、マスター。  
でも、嬉しいな。

だって、感じれば感じるほど、貴女の身体は美味しくなるんだもん。  
だから、そのまま素直にロレッタの指を感じていてね…  
ん、ちゅ、んん…れろ、うむ、んちゅ…（キス演技／10秒）」

ロレッタ17

「ふふ、アロマのキスだけでも濡れてきていますわね。  
でも…私の指でも感じて頂かないと。  
んっ…動かしますわよ、マスター。  
…ん、んん、んっ…」

SE

手マン水音

アロマ16

「んちゅ、ん…ふふ、キスの味、甘くなってきた。  
でも、もつとだよ、マスター。  
もつともつと、甘いキスを頂戴。  
あむ、んんっ、んちゅ（キス演技／10秒）」

ロレッタ18

「ああ、どんどんくちゅくちゅしてきましたわ！  
とってもいい感じ！  
ふふ、このままどんどん高まって、  
一度真っ白になりましょうね、マスター。  
ほら！」

S E

手マン激しく

S E

ヒロインイキ表現

アロマ17

「ん、んんっ、じゅる、じゅるる、んっ、んはあ！  
あ、はあ…はあ…あはは！

さつき、とびきり甘くなったよ！

…ふふ、いっちゃったんだね、マスター」――

S E

くちゅ音（指を抜く音）

ロレッタ19

「ああ…見て下さいまし。

私の指に、マスターのぬるぬるがこんなに絡みついて…。

うふふふ！

いったばかりのマスターの愛液、なんて美味しそうなのかしら。

あむ、んちゅ、んん…れろ、れろれろ…

ああ…美味しい…んちゅ、れろれろ…（指舐め／10秒）」

S E

顔をそらす

アロマ18

「ふふ、ロレッタってば、夢中になっちゃって。

でも、仕方がないかな。

だって、いったマスターの愛液って、本当に美味しいんだもん。

だからさ…僕もいーい？ マスター」――

ヒロイン

…うん

アロマ19

「ふふ、ありがと。…んちゅ。

それじゃあロレッタ、場所変わってくれる？

僕もマスターを味わいたいんだ」

ロレッタ20

「んちゅ、んは…。

ふふ、わかりましたわ、アロマ。

よいしょっと…」

S E

ロレッタ近づく



ロレッタ 2 1

「マスター。  
貴女の愛液、とーっても美味しかったですわよ。  
そのお礼に、今度はロレッタが貴女を高めてさしあげますわ。  
ほら…そのままベッドへ横になって、上の服をたくし上げて？  
ロレッタにマスターのお胸を見せて下さいまし」――

S E

ベッドきしむ音

ロレッタ 2 2

「うふふ…アロマも言っていたけれど、本当に綺麗なお胸ですわ。  
ん…こうして、優しく優しく愛撫して…  
…ん、ん、ん…うふふ。ん…ん、ん…」――

アロマ 2 0

「よっと…。

あ、わあ…ふふ！

マスターの大事な所、凄く濡れてるね。

それに、早く触って欲しいって、ひくひくしてるよ。

ああ…こんなの見てたら、貴女の中に入れたくなっちゃうな」――

ヒロイン

いいよ、アロマはそっちの方がいいんだよね

アロマ 2 1

「あ…うん、そうだよ。

僕は男性型だから、舐めるより入れる方がより美味しく摂取できる。

でも、今日はがつついたから、啜るだけにしておくんだ。

…それじゃマスター、貴女の美味しい愛液、沢山頂戴ね。

ん、れろ」

S E

布擦れ

アロマ 2 2

「ふふ、確かにもう甘いや。

でも、もつともつと甘いのが飲みたい。

だから、マスターがどうしても感じちゃう敏感な所も、

全部一緒に舐めてあげるね。

ほら…（以下クンニ演技（10秒）」

S E

ヒロイン感じる動作

ロレッタ23

「あは！」

マスターったら、とっても甘いお声！

アロマの舌が気持ちいいんですのね。

ふふ、私も負けていられませんか。

マスターの可愛い乳首、ちゅばちゅばさせて下さいましね？

あむ、んちゅ、んん…れろ、んちゅ…（以降舐め演技〈10秒〉）

アロマ23

「ああ、どんどん溢れてきた…んん、れろ、ん、じゅる、じゅる、んんっ、甘い…甘いよ、マスター。」

れろ、ん、じゅるる、んっ、もっと、もっと頂戴。

んっ、んんっ…（以下クンニ演技〈10秒〉）

ロレッタ24

「んちゅ、んん…ちゅば。」

んふふ、なんて可愛く感じていらっしゃるの、マスター。

こんなの、またキスしたくなっちゃいますわ。

ね、マスター…んちゅ、んんっ、んんっ…（以下キス〈10秒〉）

アロマ24

「ん、じゅる、んんじゅるる、んはっ！」

ああ…凄い、また甘くなった！

れろ、じゅる、じゅる、んう、こんなの、舌止めらんないよ！

ん、んちゅ、んんっ（以下クンニ演技〈10秒〉）

ロレッタ25

「ん、ちゅ、はあ…。」

うふふ、キスだけでも相当甘く感じますわ…！

マスター、もう限界近いんですのね。

ふふ…アロマ、堪能するのはそこまでにして、

そろそろマスターを最高の気分にして差し上げなさいな」

アロマ25

「ん、じゅる、じゅるる、んっ、はあ！」

ふふ、わかった。

それじゃあマスター、貴女の大好きな敏感な所、いっぱい舐めるね。

たくさん感じて、貴女の至高の味を僕に頂戴！

んちゅ、れろ、ん、じゅる、（以下激しいクンニ演技〈10秒〉）

SE

ヒロイン絶頂＋潮吹き

アロマ26

「んん、んじゆる、んっ、んはあ！

あ、はあ、はあ、はあ…！

あ、あはは！ すっごお！

マスター、貴女の腰が大きく跳ねた時、

めちゃくちゃ美味しい蜜が溢れたよ！

ふふ…イけたみたいで安心した。

ん…じゆる。

ふふ、やっぱりおいしいな…」

ヒロイン

もう、大丈夫？

アロマ27

「うん、満足したよ。

…お疲れ様でした、マスター。

僕達の為に、今日も沢山ありがとうね。

ん、ちゅ」

S E

お腹の音

ロレッタ26

「あら、マスターってば…うふふ！

でも、お腹が空いて当然ですわよね。

食事を摂られる前に、私達の相手をして下さったのだから」

アロマ28

「へへ、ごめんね、マスター。

がつついちゃったお詫びに、今夜は僕達が食事を用意するよ。

といっても固形物は摂取できないし、

粉末のスープ物になっちゃうけどね」

ヒロイン

ありがとう

ロレッタ27

「お礼なんていいんですのよ。

マスターはそのまま少しゆっくりしていらして。

…さ！ そうと決まれば早速キッチンに行きますわよ、アロマ」

アロマ29

「うん！

それじゃ、ちょっと待っててね、マスター！」

## トラック3 ぬくもり

SE

部屋でくつろぐヒロイン

ロレッタ28

「ふふ、うふふ、うふふふ！」

ヒロイン

帰ってきてからずっとと機嫌がいいね、ロレッタ

ロレッタ29

「うふふ、嬉しくて当然でしょう！」

だって、今日の模擬試合、マスターが上位入賞したんですよ？  
先生だけじゃなく、同級生達からも凄って称賛されていて……！  
ああ……どうして夜の間しかこの姿になれないのかしら！

いつでもこの姿になれるのなら、

あの瞬間にぎゅっと貴女を抱きしめましたのに！」

アロマ30

「それはダメだよ。」

僕達っていうマスターの秘密がバレちゃう。

そうになったら、僕達だって困っちゃうでしょ」

ロレッタ30

「わかってますわよ。」

あくまでたとえですわ、た・と・え」

アロマ31

「ふふ、ごめん、一応念を押したただけだよ。」

……でも、本当に凄いいね、マスター。

改めて上位入賞、おめでとうございます」

ヒロイン

二人のおかげよ

ロレッタ31

「もう、またお礼なんて言って。」

何度も言っていますけど、私達は道具なのです。

所有者様に使われてこそ、存在価値があるのですから、

マスターがありがとうなんて言う必要は全くな……あ、あら？」

SE

ロレッタにヒロインが倒れる

ロレッタ 3 2

「…ふふ、どうしたんですの、急にくっついてきて…。  
もしかして、模擬試合を無事に終えた事で、気が抜けちゃいました？」

ヒロイン

なのかな？ …ごめんね、ロレッタ。

ロレッタ 3 3

「いいんですのよー、謝らなくて。

でも、試合を頑張ったマスターには、ご褒美をあげませんとね。

…ちゅ！」

ヒロイン

え！

ロレッタ 3 4

「ふふ…どうして驚いていらっしゃるの？

ご褒美といえば、楽しくてとっても気持ちのいい事、でしょう？」

ヒロイン

…お腹が空いてるんだね？

ロレッタ 3 5

「うふふ、バレちゃいました？

でもね…ただお腹が空いているからってだけじゃないんですのよ。

さっきも言った通り、頑張ったマスターに労いがしたいんですの。

これは本心ですわ。

だから…だめ？」

ヒロイン

…わかったよ。

ロレッタ 3 6

「！ いいんですのね。

ありがとう、マスター！

それじゃ、早速寝室に行きましょう」

ヒロイン

でも汗を流してから！

ロレッタ 3 7

「え？ ええ…汗を落としてからなんですの？

うむう、確かに沢山動かれましたし、

女性型人形としては、

貴女の気持ちもわからなくは無いですけれど…うむむう」

アロマ32

「ふふ。

今日のロレッタは随分と我慢が効かないみたいだね。

うーん…あつ。

じゃあさ、皆でバスルームに行こうよ。

マスターも汗を流せるし、僕達も美味しい食事がとれる。

一石二鳥じゃない？

…ということで、僕達がいっぱいご奉仕してあげるからね、マスター」

S E

バスルームへ（場所転換）

アロマ33

「ん、れろ、ん、んちゅ、んん、んは…。

だめ、離れないで。

もつとだよ…マスター。

あむ、んちゅ、んん…（キス/10秒）」

ロレッタ38

「ん…もうっ！

結局アロマががつついていてるって、どういう事ですよ!?

したいってお願いしたのは私ですのに！

早く変わって下さいまし！」

アロマ34

「んちゅ、ん、はあ。

ふふ、ごめんねロレッタ。

でも、もうちょっとだけ待って。

もうちょっとだけだから…あむ、んん…（キス/10秒）」

ロレッタ39

「むう…夢中になってえ！

ふん、いいですわ。

先に私がご奉仕しちゃうんですから。

ねえマスター、今から貴女の身体を洗って差し上げますわね。

んっ…しょっと」

S E

ソープの音

ロレッタ 40

「それじゃ、身体に触れますわよ、マスター。  
ん、ん…ん、んっ…。  
はあ…マスターの身体って、とっても美しいですわよね。  
背中も、お腹も…とってもすべすべ。  
こうして触れているだけでも気持ちがいいですわあ。  
ん…うふ、うふふ、うふふ」

アロマ 35

「ん、んちゅ、んは…。  
ふふ、貴方の身体はとても魅力的だもんね。  
それじゃマスター、僕も貴女の身体を洗ってあげる。  
ちよっと待ってね…」

S E

ソープ音

アロマ 36

「よし、できた。  
じゃあ僕は…貴女の下半身を洗おうかな。  
よいしょっと」

S E

アロマが身体に触れる音

S E

身体を洗う音

ロレッタ 41

「うふふ、どうしたんですの、マスター。  
ふるぶると震えて…。  
もしかして、アロマが下にいる事を意識しちゃってますの？  
んもう、アロマばかり…。  
ね？ 貴女の綺麗なお胸も洗って差し上げますから…。  
私の事も意識して下さいましね。  
んふふふ」

アロマ37

「ん…ん…ん？」

うわあ…マスターの胸が、ロレッタの手でふよふよ動いてる。

こうして下から貴女の身体を眺めるのって、

結構やらしい光景だね、ふふ！

…ねえ、マスター。

僕ももっと貴女の身体を綺麗にしてあげる。

だから、もう少しだけ足を開いて欲しいな？」

ヒロイン

わかった…。

アロマ38

「ありがとうマスター。

それじゃあ洗ってあげるね…って。

…ふふ、マスターって身体も素直だね。

こーこ、もうぬるぬるしちゃってるよ」

ヒロイン

あんまり言わないで…

ロレッタ42

「あら、どうして恥ずかしがるのです？

今日はご褒美なんですよ。

身体も、そして心も、感じるままに気持ちよくなって下さいまし。

ほら、こうしてお胸を触りながら、お耳を舐め舐めしてあげますわね。

ん、れろ、れろ（耳舐め〈10秒〉）」

アロマ39

「わ、凄く凄い！ どんどん濡れて来たよ！

ふふ…すっごくやらしくて、そして…とても美味しそうな香り…！

んん…ああもうダメ！ 僕だって我慢の限界！

たくさん啜らせてね、マスター！

んっ…（クンニ演技〈10秒〉）」

ヒロイン

あ、あ、あつ、ああ！

ロレッタ43

「ちゅ、ぱ…。

あはっ！ マスターったら、なんて可愛い声なの！

そんな声を聞いちゃったら、私だって我慢できませんわ。

ねえ、私とキスしましょ！

ほらっ！ あむっ、んちゅ、（キス〈10秒〉）」



アロマ 4 0

「ん、れろ、（クンニ\10秒）

んはあ！ ああ…だめ、全然ダメ。

これだけじゃ全然満足できない。

もっともっとマスターを味わわなきゃ…！

…ねえロレッタ、まずは君が摂取して。

僕は、その後にするから」

ロレッタ 4 4

「んちゅ、んっ、んはあ！ …ふふ、なるほど。

今日はアロマも理性が効かないって事ですわね。

わかりましたわ、先に私が頂戴します。

アロマはこのままマスターへの愛撫を続けて下さいませ。

よいしょっと…」

アロマ 4 1

「ね、マスター。

もう一度僕とキスをして、お願い」

ヒロイン

ちよ、ちよっとまってほしい…。

アロマ 4 2

「ううん、待てない。

ごめんねマスター。

僕、貴女とキスをしていないと、我慢が効きそうにないんだ。

だから、もうするっ…ん、ん…（Dキス\10秒）」

ロレッタ 4 5

「ああ…本当だわ。

なんて美味しそうな香りなんですの…？

こんな御馳走を前に、待てなんて絶対に無理。

早速頂きますわね、マスター！

んん、ん、れろ、（クンニ表現\10秒）」

アロマ 4 3

「んちゅ、んん、マスター、もっと…。

あむ、んちゅ、（Dキス\10秒）」

ロレッタ 4 6

「んじゅる、れろ、れろ、んちゅ、んん…。  
んふふ、いきそうなんですの、マスター。  
ん、じゅる、なら、イって頂戴な。  
れろ、れろ、私に、極上の味を下さいまし。  
ほら、(クンニ演技 10 秒)」

S E

ヒロイン絶頂

ロレッタ 4 7

「ん、んちゅ、じゅるる。じゅるる、んん、んはあっ！  
はあ、はあ…ああ、いったマスターの味！  
最っ高ですわ！  
もつと、もつと飲みたい…んっ！  
んじゅる、れろ、れろれろ…(クンニ演技 10 秒)」

アロマ 4 4

「ん、ちゅ、はあ！  
もう、ロレッタ！  
夢中になるのもいいけど、そろそろ代わってよ。  
もう充分堪能しただろ？」

ロレッタ 4 8

「んじゅる、ん、んはあ！  
んむう…わかりましたわよ…。  
よいしょっと…ありがとうございました、マスター。  
とってもいいエネルギーを得られましたわよ、うふふ！」

アロマ 4 5

「さて、と…。  
マスター、片足をあげてくれる？  
持ってあげるから」

S E

ヒロイン動作

アロマ46

「ふふ、素直なマスター、可愛い。

…ん、ちゅ。

それじゃ、入れるよマスター。

僕をたくさん感じてね。

僕も、貴女をいっぱい味わうから、さ！

あ、ん、んっ！ んあ、あ、はあ！」

S E

アロマ挿入

アロマ47

「あは、あはは！ ああ…入ったあ。

んん…マスターの中、もう気持ちいい！

ふふ、やっぱり僕は、こっちの方が好きだね。

だって、貴女からの快感をより強く感じるんだもの。

だから…やっぱり待てなんてできない！

動くからね、マスター！

（以降、突きの演技声／10秒くらい）

ロレッタ49

「ああ、マスターあ。

なんって甘い声を出されるの？

その声を聴くだけで、私もぞくぞくしちゃいますわ！

うふふ…ねえマスター！

アロマと一緒に果てられるよう、

こうして後ろからお手伝いして差し上げますわね。

ほら、こうして乳首をきゅってしてあげながら…

あーむ…（耳舐め／20秒）」

アロマ48

「はあ、はあっ、あ、あはは！ 今、きゅって締まった！

んっ、んっ、ふふふ、僕達に触れられてびりびりきちゃった？

いいよ、もっともっと感じてよ！

僕もさ、んっ、すっごく気持ちよくて、たまないから！

んっ、ほらっ、ほ、らっ！

…あっ！ あ、あは、あはははっ！ すっごお！

奥を突く度に、貴女の快感が直接僕に流れてくるよ！

ああ気持ちいい！ ほんっとたまない！

あは、あははっ！

んっ、はあ、はあっ、はあっ（以降突き演技／10秒）」

ロレッタ50

「れろ、れろれろ、んちゅ、はあ…ふふ！  
マスターってば、すっごい。

今、自分がどんな姿になっているか、わかっていまして？  
とつてもとつても、淫らでやらしいんですよ。

うふふ、でも、それでいいんですの。

恥じらいなんて捨てて、その高まりに身を任せて。

アロマが与える快感だけを意識なさって下さいまし。

こうしてロレッタが支えながら見ていてあげますから、うふふ！」

アロマ49

「はあ、はあっ、あ、ははっ、あははっ！  
マスター、声に余裕がないね！

んはあ、はあ、いきそ？ んっ、いきそうなのっ？

んっ、んんっ、ふふ、いいよ、いって！

真っ白になって、僕にいっぱい美味しいエネルギーを頂戴！

ほら、激しく突いてあげるからさあ！

ほら、ほら、ほ、らあ！

あは、ははは、あはははっ！

（以降激しく突いている演技〈10秒〉）

SE

ヒロイン絶頂

アロマ50

「あっ、ああっ…あはあっ！

あ、はあ、はあ…ははは…すっごお！

めっちゃくちゃ気持ちいい…！

んっ、んん、んはあ、はあ、はあ、はあ、はあ…」

ヒロイン

満足できた…？

アロマ51

「はあ…はあ…。

ん？ ふふ、うん、すっごく満足したよ。

美味しい食事をありがとうね、マスター。

ん、はあ…それじゃ、抜くよ。

ん、んん、んはあ…」

SE

倒れるヒロイン

ロレッタ51

「あっとお…ふふ、力が抜けてしまいましたの？」

ふふふ、まどろんだお顔が可愛いですわね。

…お疲れ様でした、マスター。

もうちょっとだけゆっくりしたら、一緒に寝室へ戻りましょうね」

アロマ52

「そんな心配そうに見つめないで、マスター。

さすがに今日はおしまいだよ。

ほら、力が入らないなら、そのままロレッタにもたれていて。

今、シャワーをかけてあげるからさ」

SE

シャワーの音 フェードアウト

SE

ベッドに潜る音

ロレッタ52

「んはー、お腹いっぱい！

この満たされた感覚、本当に最高ですわよねえ！

うふふ！ うふふふ！」

ヒロイン

私、ちゃんと満足させてあげられてる？

アロマ53

「ふふ、もちろんだよ、マスター。

僕もすっごく満足してる。

してる時にも言っただけれど、

マスターのエネルギーってね、すっごく美味しいんだ。

多分、今迄の所有者様の中でも、一番おいしいんじゃないかなあ。

…ロレッタはどう？」

ロレッタ53

「んー。

言われてみれば、確かにそうですわね。

なぜだかわからないけれど、マスターの味って凄く癖になるんですの。

いつまでも吸っていたくなるというか…。

どうしてなのかしら」

ヒロイン

…気持ち漏れてるのかも。

二人がいたら、孤独じゃないって思えるから

ロレッタ54

「？　どういう意味ですの？

マスター、学院にお友達がいらない訳ではないでしょう？  
それなのに、どうして孤独だなんて…」

ヒロイン

…私には、家族がないの。  
捨て子なんだ。

ロレッタ55

「えっ、す、捨て子!?　マスターが!?  
ど、どうして…」

ヒロイン

私は、魔力が低かったから。だから、捨てられたの。

ロレッタ56

「そんな…。  
魔力が低いからって、親が子を捨てるなんて。  
なんて酷いお話なの…」

アロマ54

「でも、決してありえ無い話じゃないよ。

魔術師の世界って超実力主義だもん。  
マスターのように魔力の低さで悩む人は少くない。  
魔力って、遺伝に関係なく、その人が個として生まれ持つ物だからね。  
…だからこそ、僕達みたいな道具が作られる訳だし」

ヒロイン

アロマ？

アロマ55

「あ、ううん、なんでもないよ。  
やっぱりさ、貴女が僕達を拾ったのは運命だったんだよ。  
捨てた親を見返してやれっていうね」

ヒロイン

…ありがとう。ふあ…。

ロレッタ57

「ふふ…大きなあくび。  
眠くなってきました？  
それじゃ、マスターはもうお休みくださいまし。  
ほら、布団をかけてあげますから。  
よいしょっと」

S  
E

掛け布団をかける

ア56／ロ58

「それじゃ、お休みなさい、マスター」

S  
E

ロレッタの手を掴む

ロレッタ59

「？ マスター？」

ヒロイン

寝付くまで、一緒に寝てほしいな。

ロレッタ60

「えっ…。

まあ、うふふ！

今夜のマスターは随分と甘えん坊ですわね？  
寝入るまで傍にいてほしいだなんて」

ヒロイン

迷惑？

アロマ57

「ううん、迷惑なんて思うはずがないじゃない。  
貴女がそうして欲しいと望むのなら、もちろん一緒に寝るよ。  
それじゃ…」

ア58／ロ61

「よいしょっと」

アロマ59

「ふふ。

なんだか不思議な気分だね。  
マスターのベッドで眠るなんて。  
こんなこと初めてだから、少し緊張する」

ヒロイン

そうなの？

アロマ60

「うん、初めてだよ。  
だって僕は道具だもん、当然じゃない」

ヒロイン

じゃあ、これからは3人一緒に寝よう

ロレッタ 6 2

「えっ、え？

それ、本気で言っていますの？

あ、いえ…マスターの命令に従うのが、私達の務め。

これから一緒にと仰るのなら、もちろんそうしますけれど…。

その…本当にいいんですの？」

ヒロイン

うん

ロレッタ 6 3

「そう…。

じゃあ、お言葉に甘えまして、今日から一緒にしますわね、マスター！

ふふ！」

ヒロイン

ありがとね、二人とも

アロマ 6 1

「も、もう。

マスターはすぐにお礼を言うんだから。

人のように扱ってくれて、今喜んでいるのは僕達の方なんだからね。

…ほらっ、明日も学院あるんだし、貴女はもう眠ろう？

ゆっくりと目を瞑って…マスター」

ロレッタ 6 4

「ふふ、瞑りまして？

それじゃ、静かに深呼吸をして…」

ア 6 2、ロ 6 5

「お休みなさい、大事なマスター」



## トラック4 マスターの心

SE 帰ってくるヒロイン

ア63／ロ66 「お帰りなさい、マスター！」

ヒロイン ただいま

ロレッタ67 「もう、何をのんきにただいまなんて言っていますの！  
採用試験の結果を聞きに学院に向かってから、  
こんな遅い時間まで戻らないなんて！  
私達がどれだけ心配したと思って!？」

アロマ64 「そうだよマスター。

一人で行くって言うからずっと待っていたのに…。  
いつまで経っても帰ってこないから、  
試験に落ちて傷ついているのかなって  
ロレッタと色々相談していたんだからね」

ヒロイン ご、ごめんね、ふたりとも…。

ロレッタ68 「…まあ、ちゃんと反省しているならいいんですけど。  
それで、肝心の試験はどうだったんですの…？  
もちろん、合格したんですのよね？」

間

アロマ65 「マ、マスター…？」

ヒロイン …合格しました！

アロマ66 「！ 合格？ ああ…！」

ア67／ロ69 「おめでとうございます、マスター！」

ロレッタ 70

「頑張りましたわね、マスター！  
ロレッタ、本当に嬉しいですわ！」

アロマ 68

「僕も嬉しいよ！  
これで学院を卒業したら、晴れて魔術師と名乗る事ができるんだね。  
本当におめでとう、マスター！」

ヒロイン

二人に見せたい物があるんだ

ロレッタ 71

「？ 見せたいもの？  
あ、もしかして、その手に持っている袋の事かしら！  
一体何が…あつ、マスター？」

SE

鏡台に向かうヒロイン 椅子をポンポンするSE

ロレッタ 72

「…な、何ですの、あの妙な笑顔。  
絶対何か企んでいますわ」

アロマ 69

「う、うーん。  
とりあえず行ってみようよ、ロレッタ。  
ほら、マスターぼんぼんしながら待ってるし、ね？」

SE

アロマ達の足音

ロレッタ 73

「よいしょっと。  
ほら、座りましたわよ。  
それで、私達はどうしたらいいんですの？  
…目を瞑る…んですのね。  
…ん、ほら、瞑りましたわよ」

SE

ヒロイン、耳飾りをつける

アロマ 70

「わっ、ちょ、な、なに？  
急に耳にふれられたら、びっくりするよ！  
…えっ、もう目を開けていいの？  
わ、わかった…ん」

ヒロイン

鏡を見てごらん？

アロマ71

「鏡？ えっと…。

…あれ？ 耳に何かついてる…。  
これって…」

ロレッタ74

「まあ、これってイヤリングですわね！

アロマのはサファイアのついたカフス、

私のはエメラルドが飾られているのかしら！

キラキラしていてもとっても美しいですわあ…！

ね、そう思いませんか？ アロマ！」

アロマ72

「うん。

確かに素敵なアクセサリーだね。

それに、凄く高価そうだし…」

ヒロイン

喜んでくれた？

アロマ73

「うん、もちろん。

凄く嬉しいよ。

…それで、マスターのは？

貴女はどんなアクセサリーを買ってきたの？

えっ、無いつて、どうして？」

ヒロイン

二人へプレゼントする為に買ったから

ロレッタ75

「ぷ、プレゼントって…ど、どうして突然!？」

ヒロイン

今迄までのお礼だよ

ロレッタ76

「！ 今迄のお礼って…何を言っていますのよ！

私達、お礼を言われる事ではないって、

いつも伝えていたではありませんか！

…私達は魔術師に助力する為に作られた人形、

利用されてこそその存在なんですのよ。

こんな…こんな施しを受けるような立場ではありません…」

ヒロイン 道具じゃない

ロレッタ77 「えっ、道具じゃないって、どういう意味ですの…?」

ヒロイン 私はもう、家族だって思ってるよ

アロマ74 「!? …マスター、本気で言ってるの?

僕達を、家族と思っているなんて…」

ヒロイン 迷惑…?

ロレッタ78 「え…あ、あっ…い、いいえ!

迷惑だなんて思っていないせんわ!

むしろ、身に余る光栄だと感動しているくらいで…。

………」

ヒロイン ロレッタ?

アロマ75 「…ふふ。

ロレッタ、感動して声も出ないみたいだね。

すぐに戻ってくると思うから、しばらく浸らせてあげてよ、マスター」

ヒロイン ふふ、そっか。

アロマ76 「うん、お願い。

…ね、マスター。

頂いたこのプレゼント、絶対大事にするね」

ヒロイン ありがとう。

…これから、食事にする?

アロマ77 「え、食事?

…ううん、今日は大丈夫だよ。

ほら、力を使った訳じゃないからさ」

ヒロイン そう?

アロマ78

「うん、本当に大丈夫。  
氣遣ってくれてありがと、マスター」

ヒロイン

それじゃ、シャワー浴びてくるね

アロマ79

「シャワー？ そっか。

それじゃ、ゆっくりと汗を落としてきて。

…本当に良かったね、マスター」

SE

風呂場に行くヒロイン

SE

ヒロイン去る

ロレッタ79

「…こんな高価な物を用意してしまうなんて、  
マスターは心から私達を想ってくれていますのね」

アロマ80

「うん…こんな事をしてくれたのは、あの人が初めてだ。  
とてもありがたいし、凄く嬉しい。

でも…だからこそ、胸が痛い。

だって、こんな施しを受ける価値なんて、

僕達には無いんだから…」

ロレッタ80

「っ、マスター…。

うつ、くっ…ごめんなさい…マスター！

ご、めんなさ…う、うつ、うあああ、うああああ！」

トラック5 懺悔

(学院内にいるヒロイン、歩いていて突然倒れる)

SE 眠っているヒロイン

ロレッタ81 「マスター、なかなか起きませんわね」

アロマ81 「うん…」

ロレッタ82 「ねえ、これってやっぱり…私達の影響ですわよね」

アロマ82 「…そうだね。

マスターが僕達を拾って、もう数か月が経つ。

彼女の魔力の低さを考えたら、

身体(からだ)に症状が現れてもいい頃合いだ」

ロレッタ83 「…辛いですわね」

アロマ83 「うん…。

ふふ…辛いか。

おかしいなあ…所有者がこうなっていく様なんて、  
今迄散々見て来たっていうのにね」

ロレッタ84 「それくらい、彼女が今までの所有者達と違うという事ですわ。

…ねえアロマ、やっぱり魔女様をお願いしてみませんか？

もう、役目を果たせないって」

アロマ84 「またその話？ お願いしたってどうせ無駄だよ。

だって、役目を果たせなくなったドールをどうしたのか、

君だって目の前で見てるだろ？」

ロレッタ 85

「それはっ…そうです、けど。  
でも…っ」

SE

起きるヒロイン

ア 86 / ロ 86

「！ マスター！」

ヒロイン

ここは…。

ロレッタ 87

「ここは学院の医務室ですわ。

マスター、学院の廊下で突然倒れたんですのよ。

…意識が戻られて、本当に良かった」

ヒロイン

！ え、じゃあ学院!? 二人ともっ…

アロマ 87

「あ、落ち着いて、マスター。

治癒師の先生なら、ちょっと前に呼ばれていないよ。

いくら夜になったからって、

さすがに誰かがいる前で大きくなろうとは思わない。

だから、安心して」

ヒロイン

…私、どうして倒れたのかな

ロレッタ 88

「倒れた、理由は…。

貧血だって、治癒師の先生は仰っていましたわよ。

ここ最近、模擬試合とか採用試験とかで、色々頑張っていましたし、

きっと疲れが出ちゃったんですわね」

SE

起き上がるヒロイン

ロレッタ 89

「あ、帰りますの？ わかりましたわ。

それでは、一度小さい姿に戻り…え？

なんですよ、マスター…」

場面転換

S E

歩く音

ロレッタ 9 0

「なんだか不思議な感覚ですわね。  
こうしてマスターと歩いて帰るなんて…。  
それこそ、人間みたい」

アロマ 8 8

「だね、いつもはポケットか鞆の中だし。  
…マスターはいつもこんな風景の中を帰っていたんだなあ。  
ふふ、星空がとっても綺麗だ」

ヒロイン

歩いて帰るのをはじめて？

ロレッタ 9 1

「ええ、歩いて帰るのは初めてですわ。  
そもそも、私達を人のように扱って下さる事自体、  
マスターが初めてですもの」

ヒロイン

じゃあ、次からはこうして歩いて帰る？

アロマ 8 9

「マスター…うん、もちろん。  
前も言っただけど、貴女が望んでくれるなら、何だって共にするよ」

ヒロイン

うふふ、嬉しい

ロレッタ 9 2

「ふふ。…ねえ、身体は大丈夫？  
もし辛かったら言ってお下さいますね。  
この姿なら、貴女を背負って帰る事だってできますから」

ヒロイン

ありがとう、優しいね

ロレッタ 9 3

「優しいだなんて、そんな…。  
私達はただ、マスターが心配なだけですわ」

ヒロイン

嬉しいな…これからも一緒に居てくれる？

アロマ 9 0

「！…うん。  
貴女が僕達を捨てない限り…ずっと貴女の傍に一緒にいられるよ」



ヒロイン

捨てるなんてしないわ。  
だって、家族だもん。

ロレッタ 9 4

「家族、か。  
ふふ、やっぱり嬉しい響きですわね。  
すっと私の胸に入ってきて、ぼっと心が暖かくなるんですの。  
……………」

ねえマスター、私達の事…好き？」

ヒロイン

もちろん

ロレッタ 9 5

「まあ、即答なんですの？ うふふふ！  
…私もですわよ、マスター。  
私達を人と同じように接して下さる貴女がね、大好きなんですのよ。  
アロマも、そうでしょう」

アロマ 9 1

「…もちろん。  
貴方は、僕達を僕達として見てくれる。  
そんな人、好きにならないはずがないもん。  
…うん、ならないはずがない。  
あはは、口に出したら、ますます自覚しちゃうな。  
僕は貴女が大切に…もう、苦しめたくはないんだ」

ロレッタ 9 6

「！ アロマ…やっと貴方も吹っ切れましたのね」

アロマ 9 2

「うん。  
僕ももう、覚悟を決めたよ  
ふふ、優柔不断でごめんね、ロレッタ」

ロレッタ 9 7

「いいんですのよ。  
それに、アロマが同じ選択肢に至るって、私わかっていましたもの。  
だって、私達は一心同体なんですから、うふふ」

ヒロイン

二人とも…？

アロマ 9 3

「あ、あはは…ごめんなさいマスター。  
訳わからない話をしてるよね。

…すう、はあ…。

ねえマスター、貴女に伝えたい事があるんだ。  
寮に戻ったら、僕達の話聞いてくれる？」

ヒロイン

えっ…う、うん

アロマ 9 4

「ありがとう。

…それじゃ、早く帰ろう。

一秒でも早く、貴女に僕達の事を伝えたいから」

S E

歩く音

場面転換

S E

家に帰ってくる

アロマ 9 5

「…いざ、この話をするってなると、緊張しちゃうな。  
ふふ、こんな感覚も初めてだね、ロレッタ」

ロレッタ 9 8

「ええ。

でも…はじめはしっかりとつけないては。

…マスター、改めて自己紹介をさせて下さいましね。

私達は、名称ドール。

魔女様によって作られた、エネルギー吸収体ですわ」

アロマ 9 6

「僕達ドールの役目は、取り入った人間の生命エネルギーを奪い、  
その力を創造主である魔女様に捧げる事。

僕達はその役目を果たす為に、ずっと貴女の傍にいたんだ」

ヒロイン

…驚い、たな。

ロレッタ 99

「…驚きますわよね。  
でもね、これが真実。

貴女が今日のように倒れてしまったり、  
時々ふらついたりしていたのは、全て私達が原因なのです。  
私達にエネルギーを吸収された人は、ゆっくりと衰弱していくから…」

ヒロイン

どうやって吸い取っていたの？

アロマ 97

「吸収方法は、僕達にとっての食事だよ。  
つまり、セックス。

自分達が生きる為のエネルギーも、  
役目として吸収すべきエネルギーも  
どちらも性的快感から得られるんだ」

ヒロイン

エネルギーを奪われ続けた人はどうなるの？

ロレッタ 100

「エネルギーを奪われ続けた人間は最後、死に至りますわ。  
もし所有者が私達を疑い始めたとしても、  
その頃には抗う体力もなく、死人に口なし状態。  
そうしてターゲットの死を見届けた私達は、  
次の獲物を見つけ、再び食らっていくのです。  
今の貴女のように」

アロマ 98

「マスターみたいに基礎魔力が低くて優しい人はね、  
僕達にとって格好の獲物なんだ。

貴女も悩んでいたからよくわかってるだろうけど、  
魔術師を名乗る為に、何よりも重要視するのは基礎魔力。  
だから、傍に置いておくよう言葉巧みに誘導してきたんだよ」

ヒロイン

もしかして、最後は殺すつもりだったの？

ロレッタ 101

「…ええ、最終的には殺すつもりでいましたわ。  
だって、それが私達の生き方であり、役目でしたもの」

ヒロイン

じゃあどうして…こんな話を？

ロレッタ102

「正体話をした理由？」

…ふふ、そんなの決まっているでしょう？  
貴女を殺したくないと思ったからですわ」

ヒロイン

！

ロレッタ103

「今までの所有者は皆、気味が悪いからと、  
必要以上に接触しなかった人の方が普通だった。

もちろん、私達もそれが当たり前だと思っていましたから、  
扱いについて深く考えた事ありませんでしたの。

私達はエネルギーさえ摂取出来たら、

あとはどうでも良かったですから。

でも…貴女ときたら、いちいちお礼を言ったり、

こんな高価なプレゼントを贈ったり。

あげく、家族だなんて言って。

そんなの…好きになっても、仕方が無いでしょう？

だからね、アロマにずっと相談していたんですのよ。

もう、貴女からエネルギーを奪いたくないって。

…なかなか頷いてはくれなかったけど」

アロマ99

「ごめんなさい。

僕は、臆病で優柔不断だったから、色々考えてしまったんだ。

…創造主である魔女様は、とても怖い人だから。

でも、僕達を僕達として見てくれる貴女は、

やっぱり大切に、大好きで…。

さつき、やっと踏ん切りがついたんだ」

ヒロイン

大丈夫なの？

アロマ100

「大丈夫かと聞かれたら、わかんないかな。

さつきも言ったけど、魔女様はとても怖い人なんだ。

ドールは他にも存在しているけれど、

使えないと判断された人形は、簡単に破棄されていたから」

ヒロイン

そんな…。

アロマ101

「僕達は、貴女を殺したくない。  
でも、役目も果たさないといけない。  
だから、選べる選択肢といえ、  
違う人間の命を奪うって行為になるんだけど…」

ヒロイン

それはだめ！

アロマ102

「ふふ…やっぱり。  
貴女はダメだって言うと思った。  
じゃあ…最後の選択肢しかないかな」

ロレッタ104

「最後って…。  
ああ、なるほど…機能停止ですわね？」

ヒロイン

!? 本気なの？

ロレッタ105

「ええ、本気ですわよ。  
きつこの方法が、誰にも迷惑をかけずに済むんです。  
ふふ、陰で魔術師達を殺してきた人形としては、  
相応の末路ですわね」

アロマ103

「うん。  
…マスター、ずっと貴女を騙し続けてきて、ごめんなさい。  
お詫びとして、僕達の魔力を貴女に全部お渡しします。  
僕達の魔力は、魔女様のものと同様。  
少なくとも、貴女が一生を終えるまでの年月くらいなら、  
高い魔力を保持できると思うから」

ロレッタ106

「どうか、立派な魔術師になって下さいまし。  
私達、ずっとずっと応援していますわ。  
…それではアロマ、始めましょうか」

アロマ104

「うん。すう、はあ…。  
術式、展開！」

SE

魔法エフェクト音（どんどんヒートアップするSE）

ヒロイン

…ダメ！

アロマ105

「え、ダメってマスター——うわあっ！」

SE

ヒロイン アロマを押し倒す

ロレッタ107

「ア、アロマ!？」

アロマ106

「いたたた…ちょ、マスター、一体何…んんっ!？」

んっ、んちゅ、んは、ま、まって、ますたっ、  
あむ！ んん、んちゅ、ん、んちゅ、ちゅ、ま、てえ…れろ、  
ん、じゅるる、じゅるる、んんっん！（以下〈キス10秒〉）

ロレッタ108

「マ、マスター！ まって、本当にやめて！

キスも貴女のエネルギーを奪ってしまうのです！  
だから離れて下さいまし、マスター！ マスターってば！」

アロマ107

「ん、んちゅ、んっ、ちゅ、あはあっ！

はあ、はあ…。

あ、ああ…貴女の生気が僕の中に…！

どうして？ どうしてなの？

もう、貴女の命を奪いたくないって言ったのに…あっ！

んんっ、ちょ、と…マスター！

ま、まって、そんな、僕のに、触らないで！

…あ、はあ、ん、はあっ！

ます、たあ…！ 一体、どういうつもり、なの？

ん、んはっ、はあ、これ以上されたら、

僕だって我慢ができなくなる。

また貴女の生気を奪ってしまう事になるんだよ!？」

それでもいいって言うの！」——

ヒロイン

いいよ。だって、これは私の罰だから。

アロマ108

「あ、はあ…はあ…はあ。  
…自分への罰って…どういうこと？」

ヒロイン

元々ずるい事をしていたもの。

アロマ109

「！ そんな、そんなことない！  
貴女が僕達を拒まなかったのは、  
そう選ぶように僕達が誘導したからなんだよ！  
貴女はズルくない！ 何も悪くないんだ！」

ヒロイン

うん、だからね、これは3人の罰なんだよ

ロレッタ109

「えっ…3人の罰、とは？」

ヒロイン

わたしを騙した二人の罰、受け入れた私の罰。

ロレッタ110

「……。」

言いたい事はわかりましたわ。  
理由はどうであれ、  
罪を犯した者は何事にも等しく罰せられなくてはならない…。  
そういう事でしょう？  
けれど…マスターはそれでいいんですの？  
せっかく魔術師への道が開かれたというのに、  
長生きする事ができないんですのよ？」

ヒロイン

大好きなみんなで死んじゃうなら、それがいいよ

アロマ110

「あ…はは。  
大好きな人達と一緒になら、か。  
それを言われてしまったら、僕達は何も言えなくなっちゃうよ。  
でも…貴女はもう、覚悟を決めたんだね。  
…わかったよ、マスター。  
貴女がいいと許してくれるのなら、ずっと傍にいる。  
だって、僕達の今の所有者様は…貴女なんだから」

ヒロイン

ふふ、良かった。

ロレッタ 111

「もう、そんな幸せそうに笑わないで下さいまし。  
どう気持ちを返せばいいのか、わからないんですからね。  
うふふ」

ヒロイン

それじゃ…ご飯にしようか

アロマ 111

「！…ふ、ふふ、貴女って人は本当に…。  
でも、ありがとうマスター。  
それじゃ、お言葉に甘えて…貴女の事をいたたくね」



## トラック6 一蓮托生

SE 服を脱ぎ、ベッドに座るヒロイン

ア／ロ112 「……」

ヒロイン どうしたの？

ロレッタ113 「あ、ご、ごめんなさいまし。

その、今迄は役目と生きる為だけにしていたでしょう？  
だから、ただする為だけになって思うと、その…緊張してしまっ…」

ヒロイン 気にしないでいいのに

アロマ113 「気にするなって言われても気にしちゃうよ。

だって、嫌だと思っ…でも、  
絶対に生気を奪ってしまうんだもん…」

ヒロイン 仕方がないなあ、私からしてあげるよ

アロマ114 「えっ…マスターからって…あ、わっ！」

ロレッタ114 「マスター!？」

SE アロマをベッドに倒す

アロマ115 「び、びっくりした…。

もうマスター、いきなり押し倒したらびっくりする…  
んっ!? んんっ、んちゅ、んっ、(受けキス(5秒))  
んちゅ、んはあ! はあ、はあ…マスター…。  
んっ、あむ、んちゅ、あ、んっ…んちゅ…(10秒くらいキス)」

ロレッタ115 「ああ…アロマ、なんて気持ちがよさそうなの…。

私も、私もそんな風にマスターを感じたいですわ。  
ねえマスター…。  
せめて私にも触れさせて下さいまし」

ヒロイン

いいよ

ロレッタ116

「！ いいんですのね？」

ありがとうございます、マスター。

んっ…しょっと。

ではマスター、貴女の味ももっと甘くなるよう、

お身体を高めて差し上げますわね。

ほら…こうして後ろから、お胸に触れますわよ。

んっ…ん…うふふ、何度触れても柔らかいお胸…。

私の大好きなお胸ですわ…うふふ。

ん、ん、ん…」

アロマ116

「あ、んっ…んちゅ…（キス／5秒）

んっ、ん、んちゅ、ん、ちゅはあ…ふふ。

ちよっとだけ甘みが強くなったよ、マスター。

ロレッタが触れたからかな？」

ヒロイン

うん…もつと感じて、アロマ

アロマ117

「うん…僕も、もつともつと貴女を感じたい…。

だから、たくさんキスさせてね…。

はむ、ん、れろ、じゅる、じゅるる、んんっ、ん（Dキス／10秒）」

ロレッタ117

「ふふ、どんどん身体が暖かくなっていますわよ、マスター。

それに…下の方から甘い香りが、ふわふわと漂ってきて…。

ああ…やっぱりダメ、我慢できませんわ！

んっ…。

まあ…んふふ、やっぱり濡れていらっしやる。

なんて美味しそうなんでしょうか。

ごめんなさいマスター。

私…頂いちゃいますわね、んっ、れろ…（クニニ演技／10秒）」

アロマ118

「んちゅ、ん、ん、んはっ！

…ふふ、口離れちゃったね。

ロレッタの舌、感じちゃった？」

ヒロイン

う、んっ…

アロマ119

「ふ…やっぱり。

そうやって感じる貴女の顔、とっても可愛い。

ねえマスター、そのままロレッタに

甘い蜜を沢山味わわせてあげて。

今度は僕が、貴女の身体を愛撫してあげるから…ほら。

こうして、胸を触りながら…んっ、（乳首舐め〈10秒〉）」

ロレッタ118

「ああ、より甘みを感じてきましたわ。

こんなの、こんなの舌が止まりません…。

ん、れろ、じゅる、じゅるる、んん、

んじゅる、じゅるる（クンニ演技〈10秒〉）

もっと…奥まで…んっ、れろ、じゅる…（クンニ演技〈10秒〉）」

アロマ120

「ん、んちゅ、んは…。

はは、マスターってば、もう限界近いんじゃない？

…ロレッタに沢山舐めてもらって、一度真っ白になる？

下の敏感な所、僕も触ってあげるからさ」

ロレッタ119

「ん、じゅる、じゅるる、んんんっ、んはあ！

マスター、マスター！

んっ、（クンニ演技〈10秒〉）」

ヒロイン

絶頂

ロレッタ120

「じゅるる、じゅるる、んっ、んんっ！ んちゅ、んはあ！

はあ、はあ…あはあ…！ なんて素敵な味なの！

今迄よりも、すごく甘みを感じましたわ。

うふふ…これってやっぱり、心の底から

マスターを感じるようになったからかしら」

ヒロイン

よかった…？

ロレッタ 1 2 1

「ええ、ええ……！」

とっても美味しかったですわ、マスター。

沢山舐めさせて頂いて、ありがとうございます。

ん、んちゅ、んっ……んふふ、キスもとっても甘い……。

ん、んちゅ……マスター……好き……ん、んちゅ、んんっ……(キス／5～6秒)  
ん、ちゅ、はあ……はあ……」

アロマ 1 2 1

「……ロレッタ、凄く恍惚としてる。

貴女の味は、前からとても美味しかったけど、

そんなに感覚が違うんだ……。

ねえマスター、僕も貴女を味わいたいよ。

いい？」

ヒロイン

もちろん

アロマ 1 2 2

「！ マスター……。

ふふ、ありがとう。

それじゃ、僕の顔に腰を落としてくれる？」

S E

腰を下ろすヒロイン

アロマ 1 2 3

「ああ、なんていい眺めなんだろう。

貴女の美味しいそうなところが、こんな目の前に……。

それじゃ、舐めるねマスター……。

ん、れろ、れろ、(クンニ演技／10秒)」

ロレッタ 1 2 2

「うふふ、マスターってば、すっごくやらしい腰つき。

アロマの舌、気持ちがいいんですのね。

なら、舐めて欲しい所にぎゅっと押し付けて、

もっともっとアロマに甘えて下さいまし。

私も、貴女のお胸を揉んで差し上げますから！

んふふ、んふふふ！」

アロマ124

「んっ、れろ…んはあ。  
ああ、美味しい…！」

貴女の愛液、今迄以上に別格な味だよ、マスター！  
んっ、れろ、じゅる、じゅるる、（クンニ演技〈5秒〉）  
ん、れろ、じゅる、じゅるる、じゅるる…んっ、あっ」

S E

ヒロイン 離れる

アロマ125

「あ、あれ…？ マスター…どうして、離れちゃうの。  
僕、もっと貴女の蜜を感じていたいよ」

ヒロイン

アロマは入れる方が好きでしょ？ 入れてあげる

アロマ126

「！ 僕に入れてくれるの？ ……そっか。  
へへ…嬉しいな。  
…それじゃあ、お願いします、マスター」

S E

ヒロイン アロマに挿入

アロマ127

「あ、んっ、ああ、あ、あ、あはあっ！  
あ、あはは…なに、これ。  
前にマスターに入れた時と、全然感覚が違う。  
う、んんっ…貴女からの快感が、凄いや。  
ん、んん…うふふ、この、甘く感じるのってさ、  
ロレッタも言っていたけど、  
きつと、僕達の気持ちに通じているからなんだね。  
じゃないと、ん、はあ…こんなに、幸せだなんて、絶対想わないもん。  
あ、はあ、はあ…」

ヒロイン

動くよ、アロマ

アロマ128

「…うん、いいよ。  
貴女のタイミングで、動いて。  
あ、あっ、んっ、んん、んはあ、はあ、  
（以下ヒロインからの騎乗位喘ぎ〈15秒〉）」

S  
E

ベッド軋み音

ロレッタ123

「……」

マスター、夢中で腰を振っていますわね。

アロマと一緒に気持ちよくなっているのが、良くわかりますわ。

…どうしてかしら。

今迄アロマが貴女の中に入れていても、何も思わなかったのに。

どうしてか今は、自分が女性型である事が凄く寂しい…。

ねえ、ねえマスター。

私がこうして愛撫している事、ちゃんと意識して下さいます？

どうかロレッタの事も感じて下さいまし…！」

ヒロイン

じゃ、キスしょ？

ロレッタ124

「！ ……はい、はい！」

いっぱいいっぱい、キスしますわ。

こっち向いて下さいまし…マスター。

ん、んちゅ、ん…ますたあ…あむ、んちゅ…

（キス／10秒）

アロマ129

「はあ、はあ、はあ、んっ、ああ！」

今、きゅってしまった…！」

んっ、んっ、マスター、感じてるんだね！

ん、はあ、はあ、はあ、貴女から…んっ、

エネルギーが、僕に、流れてる、から！

んはあ、はあ、はあ、やだな、もう。

んっ、本当は、これ以上、吸い取りたくなんて、ないのに！

んっ、あ、はあ！ はあ！ 美味しくて…んっ、

離れて欲しくないって、思っちゃうよお！

あ、はあ！ あは！ （以降突き喘ぎ／10秒）

ロレッタ125

「んちゅ、んん…んはあっ！

…アロマの気持ち、よくわかりますわ。

こうして唇を交わすだけでも

私の中にエネルギーがいっぱい流れてきますもの。

もっともっとマスターと気持ちよくなりたいけれど、

でも、これ以上はきつと、沢山貴女の命を削ってしま…

んっ!? ん、んちゅ、ん！ んんっ、ま、て！

ます、たあ…あむ、んちゅ、んんっ、んじゅる、

んん、んんんっ、んはあ！

あ、はあ、はあ…マ、マスター？ はあ、はあ…」

ヒロイン

私がいいって言ってるの。

二人ただ…ほしいままに、感じていて！

アロマ130

「！ 僕達の…欲しいままに…って！

あ、あっ、ああ！

マスター、激しいって！ んっ、んああ！

だめ、だよ！ そんな、そんな激しく動かれたら、

僕、どんどん気持ちよくなっちゃう！

あ、ああ、んっ、んっ、なに、これ。

んっ、あ、はあ、はあ、気持ち、いい！

んっ、マスターの中が、気持ちよくて、快感が、美味しくて！

僕、僕、もう、どうにかなりそう！

んああ！ はあ！ はあ！ はあ！

ヒロイン

ロレッタ、おいで！

ロレッタ126

「え、おいでって…あ、きゃあ！」

SE

横になるヒロインとロレッタ

(騎乗位から後ろを向いてロレッタを押し倒しています)

ロレッタ127

「あ、マスターが、私を見下ろして…。

っ…あ、あら？ どうしたんでしょう、私。

何だか、急にドキドキしてきて…。

…またあ…私…あ、んん！

んむ、ん、ちゅ、んん…んちゅ…んはあ…！

マスター…好き…んちゅ、んっ（キス／10秒）」

アロマ131

「はあ、はあ！

…貴女の背中、こんなにも…綺麗、だったんだね！

んっ、んっ、あ、はあ、はあ…マスター、ごめん！

僕…僕ももう、欲望が止められない！

貴女を、激しく抱きたい！

んっ！ はあ！

はあ！ はあ！ はあ！ 好き、好きだよマスター。

もっともっと僕で感じて、感じて！

壊れるくらいに僕で一杯になって！ ほら、ほらっ！

あっ、はあ、はあ、あ、あはは！

こうやって後ろから突いたら、もっと締まるようになったよ！

ふふふ、気持ちがいいんですよ、マスター！

あ、はあっ、はあっ、あはは！

凄い、凄い！

びりびりって、僕の中に貴女のエネルギーが入ってくる！

んああ、あああ！ 甘い、甘いよ、マスター！

んっ、んっ、んふふ、はは！ はあっ、はあっ、はあっ！」ロレッタ1

28 「ん、んちゅ、んんっ！ れろ、んんっ（以下Dキス／5秒）

ますたあ、好き…好きですわ、マスター！

あむ、んちゅ、んんっ、れろ、ん、じゅる、じゅる！

（以下Dキス／10秒）」



アロマ132

「あ、はあ、はあ、あ、あはは！ 気持ちいいよマスター！  
 はあ、はあ、僕は、僕は貴女を殺したくない。  
 でも、やっぱりこの快感の味には抗えない！  
 だから…だから、僕はこれからも貴女を抱く！  
 貴女から沢山美味しいのを貰うんだ！  
 んっ、んっ、んふふ、いいよねマスター。  
 あ、はあ、はあ、はあ、あっ、あはは！  
 僕とロレッタのキスで、もう夢中なんだね。  
 …いいよ、このまま、貴女のいい所をたくさん突いて  
 今日最高の高みに昇らせてあげる。  
 ほら、ほら、ほらっ、ほらあ！（以下激しい突き演技（10秒）」

ロレッタ129

「ん、んちゅ、んはっ！  
 あ、はあ、はあ…うふふふ！  
 マスター、切羽詰まったお顔をされて…！  
 もういきそうなんですのね？  
 んっ…ほら、こうしてロレッタが手を繋いであげますから。  
 だから、安心していって下さいまし、マスター！」

アロマ133

「あ、ああ、あああっ、あんっ、くっ、ん、んはあ！  
 ああ、くる、んっ、くる、くる！  
 あ、あは、あはは！ ほら、いって、マスター！  
 訳わかんないってくらい、ぐちゅぐちゅになって、  
 僕に最高の味を与えてえ！ あ、あああっ、ああああ、んああっ！」

S E

ヒロイン絶頂

アロマ134

「あっ、あああ、ああ、あっはあ！ んはあ！  
 あ、あ…あ、ははは！ はははは！ すんごお…！  
 あはは、あははは…！  
 はははっ…んはあ！ はあ、はあ…はあっ！」

S E

倒れるヒロイン（ベッド軋み音）

ロレッタ130

「！ マスター!？」

アロマ135

「…あっ、あ！　だ、大丈夫!?　マスター！  
ごめんね、すぐに抜くから！  
んっ、ん、はあ…！」

SE

アロマが抜く音（水音）

アロマ136

「…マスター、本当にごめんね。  
僕、またあんなに動いちゃって…」

ヒロイン

お腹、いっぱいになった？

アロマ137

「え？　そ、それは、もちろんだよ。  
お腹も一杯になったし、凄く…美味しかった」

ヒロイン

ロレッタも？

ロレッタ131

「ええ、私ですわ。  
…命を張って下さってありがと、マスター」

アロマ138

「僕も、ありがとうマスター。…あっ」

SE

二人を抱きしめるヒロイン

ア139／ロ132

「…マスター？」

ヒロイン

私達は最後まで一緒だよ…約束。

アロマ140

「！　…うん、もちろん。

…ねえマスター、改めて誓わせて。

僕達は、これからも貴女だけの補助道具となって、ずっと力になるよ。  
だから、貴女も命が続く限り、自分が望む魔術師になって下さい。

…そして、貴女の死を見届けたその瞬間、僕達もただの人形に還るよ」

ロレッタ133

「それまでどうか、末永くよろしく願いますわね」

ア141／ロ134

「最愛の、マスター様」